

又傳教滅後惠心已來の本覺法門の終窮歸結と云ふべきだ。

茲に於てか眞淨の念佛易行、天台の理觀精修何の面目がある。噫大なる哉本化の教觀、仰で信すべく伏して思ふべしだ。

(六) 結 論

聖德太子に胚胎し、傳教大師によつて教理的基礎を得た「三佛冥合」「鎮護國家」の理想は吾祖の「三

大秘法」「立正安國」の金策となり延て二陣三陣の殉教的犠牲の努力奮闘は之が具現化を物語つて居る。翻つて日本佛教の變遷過程を顧るとき、悉く是れ吾が本化一大圓教宗、結論への先序であつた根本大師の後五百歳遠活妙道と云ひ、且つ正像過稍已末法太有近の美望と嘆聲を聞くまた宜哉である。

己 上

成佛論祖判文證類集

藤 田 沼 南

祖 判 題 名	作 地	著 作 年 次	寶 算	縮 遺 頁 數	大本遺文錄丁數
戒体即身成佛義	清 澄	仁治三年 (又ハ云文永三)	二十一	一〇	二十
一生成佛鈔	鎌 倉	建 長 七 年	三十四	一四 一七	十四 三十七

御妙 法法 返尼 事御 前事	內證 佛法 血脈	一念 三千 法門	六難 九易	始聞 佛乘 義	即身 成佛 義	〃	撰時 鈔	法華 初心 成佛 鈔	成佛 用心 抄	秀句 十勝 抄	法花 題目 抄	女人 成佛 鈔
身延	〇佐 谷方 渡	鎌倉	〃	〃	〃	〃	〃	〃	身延	塚原	清澄	安房
弘元 年	弘永 十年	正嘉 二年	弘安 元年	建治 四年	〃	〃	建治 元年	建治 三年	建治 二年	文永 八年	文永 三年	文永 二年
(五十七)	五十二	三十七	〃	五十七	〃	〃	五十四	五十六	五十五	五十	四十五	四十四
一、七五一	九二〇	二、一〇	一、七四一	一、七二三	一、二七一	一、二〇九	一、一八九	一、六九二	一、五二三	七一八	五九、四〇五	五二九
廿五十	十四廿六	四十四	二五初	廿四十五	十九十七	〃卅六	十八十五	廿四廿六	廿三	十一 五十四	十一	九十三

御妙 法尼 返御 事前	〃	妙一 女御 返事	〃	總三 勘世 文諸 抄佛	御千 日尼 返御 事前
〃	〃	〃	〃	〃	〃
弘 安 四 年	〃	弘 安 三 年	〃	弘 安 二 年	〃
六 〇	〃	五 十 九	〃	五 十 八	〃
二、〇八九	一、九八一	一、九六四	一、九〇三	一、八九七	一、七五六
三十卅八	廿九四	廿八卅六	廿七卅七	廿七卅二	廿五十四

以上即身成佛論ノ文證ト見ルベキモノ也中ニ於テ天台附

順佐前ノ御作アリ在島本意顯發ノ御著作アリ佐後流通還

昔ノ作アリ而シテ又對告衆ニ隨テ内證外用一途ナラザルアリト雖

モ要スルニ當家成佛ヘ十界所有ノ當相ヲ本覺眞体トスルニ

結歸スルニ在リト可謂也

然リト雖諸先哲ノ議各々異点有之大イニ研鑽スベキ義門ナリ

吾人モ又時ヲ得自己ノ見解ヲ發表セシムル事ヲ期スト雖モ今ハ唯

先キモ學師カ余ニ授ケラレシ成佛論祖判文證類集ヲ提グル而

己之レ以テ斯道攻究者カ鑽仰ニ一助ヲラハサガ意既ニ満足シ

三熱の炎と偉大なる暗示

荒 木 經 明

現實の吾々の生活を考へて見れば、全く手も足も出ない様に迄威容を失墜せられ、而かも、其中に自己の生活を、少分でも完全に、若しくは、幾分でも不満なく送つて行かんとして東西に急ぎ、南北に走り焦慮すること他その見る目もいたましくらいである。其中に高貴の人あり、賤之男あり